

連れ合いを亡くしたAさん(六七歳)。こんな励まし方があるのかと、嬉しい思いをしています。

退職した夫と第二の人生にと、やっと探した山裾の理想的な場所。二人で設計した家が完成してまもなくの夫の死。周りには懇意にしている人もいません。

でも一か月後から、奇妙なことが始まります。チャイムが鳴って出ると近くに住んでいるらしい男性。「〇〇さん、元気?」「元気ですよ」すると片手で「OK」サイン。ただそれだけで行ってしまいます。

何? なんなの? そんなことがたびたび。散歩の途中かな。い

やわざわざ寄っているのかも。

またある日のこと。「〇〇さん、犬の散歩に行くけど行きませんか?」。知らない人です。はあ、とげげんに思いつつ、出か

同時代を生きる女性たち 一人暮らしを励ます

瀬谷道子

す。「ちょうど雪かきをしようと思っていた」と。ついだからやります」

どうもおかしい。雪かきを始めたことをどうして知っているんだ?

そうか、じっと見守っていたんですね。Aさんの家は坂の上の男性の家から丸見えでした。

犬の散歩の女性は、夫が廃棄物処理工場反対で運動していたときの仲間と後で知りました。

そして雨の日、編み笠をかぶって通る女性がいきました。面白いものをかぶっているなあと見とれていると、家の前で止まり、「あなたに読んでほしい雑誌があるんです。よかったら見てもらえます?」。ええっ。見たことがあるような、ないような人。「お茶でもいかが?」とすすめ、友だちづきあいが始まりました。

雑誌は『ウィメンズ・ステージ』。「私と同じ気持が出ていてどんなに救われたことか」と読者になったAさん。

実は昨日、Aさんのお宅に泊まったばかりです。(女性誌「ウィメンズ・ステージ」編集長)



こんな景色